

# 粟津作品 音でつむぐ

## イメージを作曲、7人が挑戦

金沢市広坂1丁目の金沢21世紀美術館で開催中の展覧会「荒野のグラフィズム・粟津潔展」の関連企画として、作品を鑑賞して抱いたイメージから音楽をつくる作曲ワークショップが開かれている。芸術に音楽を融合させる珍しい試みで、一般公募で集まった7人の参加者は、6日の発表会に向けて最終調整に余念がない。

21世紀美術館  
きょう発表会



発表会の舞台となる展示室で、本番に向けて曲の流れを確認する参加者と榎山智子さん（左）＝金沢市広坂1丁目で

展覧会には、絵画、映像、版画などあらゆるジャンルに挑戦し、グラフィックデザインの礎を築いた芸術家粟津潔さんの作品約1750点が展示されている。これらの作品との対話を通して抱いた感動や発見を、音楽という形で表現できないかと同美術館が企画。「次元を跨ぐ旅」地図から生まれる音楽」と題し、作曲家の榎山智子さん(30)をファシリテーター(進行役)に招いた。参加者は24歳から70歳と年齢の幅もあり、音楽経験者からそうでない人まで様々だ。4日から始まった作曲作業では、まず八つある展示室を全員で鑑賞し、展示室ごとにそれぞれが気づいたことや何に心を動かされたかなどを共有するとともに、それを紙に書き、例えば、「くり

返しの中の変化」といった粟津作品から浮かび上がるキーワードをもとに音をつけていった。曲調から選んだ楽器はピアノやギターのほか、大正琴、オカリナ、テルミン、ハーモニカ、リコーダー。メロディーはシンプルだが、楽器の合わせ方や音の強弱、曲のスピードに変化をつけた。音楽の中盤では歌も盛り

込み、最後は一つの展示室から抱いた「慈愛」を表現する予定だ。榎山さんは「曲とは物語。短い時間だったが、いい物語ができた」と手応えを感じている様子。参加者も「作品を深く知ることができた」と口をそろえる。金沢市の主婦中谷あゆみさん(37)は「最初はどんな曲ができるか見えなかったけど、

楽しく作曲できた」。英語講師のジュリア・ウォルフソンさん(24)は「いろんな作品の見方を知ることができ、アートと音楽のつながりを感じた」と満足げだ。発表会は展示室の一つ「ワークショップ・ルーム」で6日午後2時から午後4時半まで随時。粟津潔展の当日観覧券があれば無料。

(第3種郵便物認可)

# 福井市出身の作曲家・椋山さん演奏会

## アートと連動 幻想の曲披露

福井市出身の作曲家、椋山智子さん(30)が6日、金沢市の金沢21世紀美術館で著名なデザイナー栗津潔さんの展覧をヒントに生まれたオリジナル作曲作品を発表する演奏会を開いた。絵画に囲まれた展示室で行われた演奏会では、絵画と音楽、人が一体となった幻想的な世界に訪れた人々を誘った。  
(加藤聖子)

このイベントは、同美術館で、それぞれが抱いた感想やイメ三月二十日まで開催中の「荒野―ジを紙に書き出して―八つの展のグラフィズム―栗津潔展―」に、展示室の「地図」を作り、椋山さんと同美術館が公募した七人、演奏楽器はオカリナやピアノの金沢市民が協力して、栗津さんの「リコーダー」など、演奏者がのポスターやデザイン画、映会場内を歩き回り「ヨ―ヨ―ヨ像など千七百五十点の作品展示―」という声を発表すると、声から生み出した、作曲作品「21世紀の子守唄」を発表した。その後企画のタイトルは「次元を跨ぐ旅―地図から生まれる音―」は個々の楽器が音を主張し合う。椋山さんと参加者が一緒に演奏する「栗津さんのポスターを表現。に三日前から作曲を始め、参加最後は愛や優しさにあふれる作

### 「生きた作品でできた」

### 金沢21世紀美術館



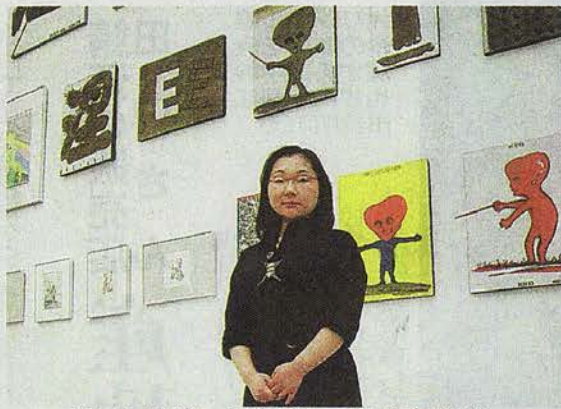
作品に囲まれて演奏する椋山智子さん(左)たち。6日後、金沢市の金沢21世紀美術館で(加藤聖子撮影)

品を反映させるように、オカリナ、取り組むなど、音楽の新しい道すが川の流れのような柔らかなを模索している。  
椋山さんは福井市出身で父親の転勤に伴い十三歳から渡米。た、作品を作ることができたの名門スタンフォード大学で作曲では「と満足。演奏を聴いたを学んだ。現在は東京を拠点、金沢市の西川由美さん(38)はに、米国、インドネシアなど国、一周りの作品と相まって、不思議内外で音楽活動を展開し、現地、議な空間ができていた」と感動の人たちと共同して作曲活動にしていた。

# デザイン画作者の世界を表現 作品展示室で曲披露 「旅を通した曲作りがベース」

## 福井出身の作曲家・椋山さん前衛的試み

米国の名門、スタンフォード大学で作曲を学び今後の活躍が注目される福井市出身の若手コンポーザー（作曲家）、椋山智子さん（30）。金沢市の金沢21世紀美術館で開催中のグラフィックデザイナー・粟津潔さんの作品展からインスピレーションを得て作曲、今月六日にその曲を展示室で披露する前衛的な試みに挑戦した。今回の企画に対する思いや、作曲のスタンスについて聞いた。（加藤聖子）



「人と地球から生まれてくる音楽が、私の音楽のベース」と語る椋山智子さん＝金沢市の金沢21世紀美術館で

中学三年生から十年半、米国に在住。その後は東京を拠点に中国、タイ、インドネシアなど各国を渡り歩

いた。今回の企画「次元を跨ぐ旅―地図から生まれる音楽」のテーマにもなっている「旅」は、椋山さんの作曲全体に共通するテーマでもある。

「旅を通してできた人と五十点が並ぶ八つの展示室は、粟津さんの作品千七百

「旅を通して曲作りをきっかけとして、アイデンティティーの異なる人間たちが

人、人と地球、環境そのものから生まれてくる宇宙的な音楽、それが私の音楽のベース。訪れた場所では現地の人と共同

相互に対話する。さまざま

な音楽、それが私の音楽のベース。訪れた場所では現地の人と共同

な問題がひしめき合う現代社会に生きる中で「そいつ

を一般公募の参加者七人とともに「旅」し、共有した思いを曲にした。

「同じモチーフが幾何学的に並んでいる部屋、炎上するピアノを写し続けた映像が流れる部屋、色、情報にあふれたポスターが張り巡らされた部屋をたどると

「反社会的、虚無感を感じる作品もあるが、全体で見ると粟津さんの万物に対する愛、祈りが感じられた」という。

そんな思いから生まれた曲は、個々の楽器が力いっぱい音を出す暴力的な一節も含んでいる。しかし、最初と最後は、参加者が「ヨヨーヨー」とつぶやくように声をこたませ、会場全体を慈愛に満ちた柔らか

な音で包み込んだ。「出来上がった曲は確かに私の曲っぽいけれど、私一人では作れない曲」

旅を通して曲作りをきっかけとして、アイデンティティーの異なる人間たちが

旅を通して曲作りをきっかけとして、アイデンティティーの異なる人間たちが

旅を通して曲作りをきっかけとして、アイデンティティーの異なる人間たちが